

## 郷土文学館長 新任ご挨拶



令和7年4月に弘前市立郷土文学館長兼弘前市立図書館長に就任いたしました小田桐康眞と申します。

私は、故郷・青森へのUターンを機に、令和6年2月より指定管理者であるTRC・アップルウェーブ・弘前ペンクラブ共同事業体に所属し、現在に至っております。どうぞ、宜しくお願ひいたします。

さて、郷土文学館では4月から今年度の新しい企画展「第49回企画展 生誕90年 寺山修司ー放たれた歌」が始まっておりますが、私は「館長に就任したタイミングで、寺山修司の企画展」ということに、人生の面白さを感じております。

私にとって「寺山修司」と言えば、同じ共同事業体である弘前ペンクラブの船越素子会長が真っ先に思い浮かびます。船越会長は、高校時代の担任の先生なのです。※以降、船越先生と記します。

当時、遊び呆ける私たちに対して船越先生がよく話していたのが、寺山修司の「書を捨てよ、町へ出よう」のお話しです。「勉強しないで、遊んでいいよってわけではないんだよ。」と何度も諭されました。しかし、当時の私はその本を読むことはなく、またそのタイトルの意味を全く取り違え、依然遊び呆ける日々を過ごします（先生、ごめんなさい）。結果、赤点と戦い。

しかし「書を捨てよ、町へ出よう」というタイトルのカッコよさは強く印象に残っており、高校を卒業し間もなくその本と出会

い内容に刺激を受け、そしてかつて船越先生が話していたことを思い出しては「寺山修司ってカッコイイな」と感心し、特に社会に出てからの仕事への取り組み方については道標となっていました。時は経ち、館長として一日目である4月1日に開催されたこの企画展の開会式。

冒頭に弘前ペンクラブの会長である船越先生の挨拶。高校生以来、40年ぶりに聞く船越先生のお話し。しかも寺山修司について。高校時代にタイムスリップした感覚が。続いて、私の新館長としての挨拶。大人数を前にした挨拶の経験がないわけではありませんが、すべてがリセットされた感覚。今までこれほど緊張したこととはあったんだろうか。でも、改めてこの郷土文学館が地域の人々が誇りに思える施設にしていきたいと思いました。

この郷土文学館は、明治以降各分野で活躍した郷土出身の著名作家10名に関する展示が強みの一つですが、私は、年度ごとに開催される企画展、そしておよそ四半期ごとに開催されるスポット企画展に弘前市立郷土文学館としての面白さを感じています。県内でも第一級の見識と実績を誇る企画研究専門員の櫛引洋一さんをはじめとするスタッフのみんながテーマに関する研究を重ね、研究結果が次々と繋がり、スタッフのみんなの思いが込められて一つの企画展として完成します。それは、展示の内容もさることながら、まとめ上げたスタッフの話を聞くのがまた面白いのです。

ぜひ、郷土文学館にいらして、スタッフにそのような話を聞いてみてはいかがでしょうか。

弘前市立郷土文学館（弘前市指定管理者）館長 小田桐 康眞

## スポット企画展

## 没後50年 棟方志功と津軽文士

現在開催中

令和7年4月16日～令和7年7月7日



復刻版『まるめろ』の装丁案  
散逸し「幻の詩集」と呼ばれた高木恭造の『まるめろ』（昭和6年）を、氏の50歳を記念して復刻再刊するにあたり、志功が装丁を引き受けた。復刻版は昭和28年5月25日、風の木社より刊行された。

## お知らせ

## 〈北の文脈文学講座〉第3土曜日 午後2時～3時

6月21日（土）「若山牧水と和田山蘭」  
講師：館田 勝弘（青森県郷土作家研究会代表理事）

7月19日（土）「寺山修司と歌壇、俳壇の人々～和田山蘭、角川春樹、成田千空など」  
講師：世良 啓（文筆家）

## 〈文学忌〉

忌日を含む1週間程度ロビー展示を行います。忌日は無料開館、午前10時より朗読があります。

5月18日 平田小六 6月3日 佐藤紅緑 6月19日 太宰治  
7月23日 葛西善蔵 9月2日 陸羯南

## 北の文脈ニュース 第92号

Kitano bunmyaku news

第49回企画展

## 「生誕90年 寺山修司ー放たれた歌」

会期：令和7年4月1日～令和8年3月21日

昭和29（1954）年、寺山修司は「チエホフ祭」で『短歌研究』の「第二回五十首応募作品」特選を受賞、33年には第一歌集『空には本』を上梓、歌壇の寵児となりました。まさしく〈歌は放たれ〉、彼の歌は現代短歌の地平を切り拓きました。

この企画展では、第一章で寺山の第一歌集『空には本』に光を当て、改めてその魅力に迫ります。第二章では短歌界の芥川賞といわれる角川短歌賞を受賞した青森県ゆかりの三歌人、江流馬三郎（中村雅之）、梅内美華子、渡邊新月の受賞作に注目し、現代に〈放たれた歌〉の魅力を紹介します。さらに、第三章では明治・大正期に遡り、県歌壇の先達・加藤東籬、和田山蘭と若山牧水の交流を中心に、新しい短歌に向かう青森県歌壇黎明期の情熱と息吹を概観します。

寺山修司は、昭和10（1935）年に弘前市に生まれ、今年が生誕90年にあたります。この節目の年に、寺山によって〈放たれた歌〉の意義を浮き彫りにします。

## 〈展示構成〉

## ○第一章 寺山修司 若き日の歌ー『空には本』

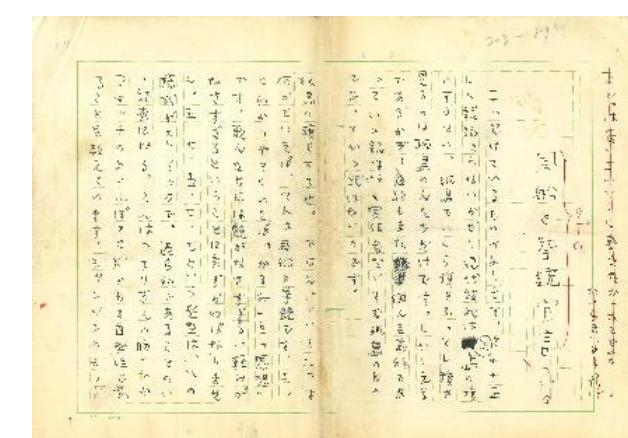
『空には本』二十首抄、寺山修司の短歌『空には本』を中心として、装幀に見る『空には本』、病室からの手紙－恩師・中野トクヘ、原稿「チエホフ祭」「風船と拳銃宣言」

## ○第二章 角川短歌賞受賞の三歌人

江流馬三郎（中村雅之）「縦走砂丘」、梅内美華子「横断歩道」、渡邊新月「楚樹」

## ○第三章 青森県歌壇、黎明期の息吹

- 1 新詩社第一支部結成、2 「吾が胸の底の茲」「燃ゆる火の胸の琴」、3 蘭菊会の誕生、4 新派和歌雑誌『東北』創刊
- 5 最初の新派歌集『花さかぬ木』、6 若山牧水の来県、7 『黎明』創刊



## 原稿「風船と拳銃宣言」

（青森県近代文学館蔵）

寺山は、現代短歌を「孤島の旗」にたとえ、そこに欠けているものとして「風船」と「拳銃」、すなわち「軽み」と「思想」の2つを挙げている。寺山は「シャンソンのもつのような一種の『軽み』が短歌の社会性である」と考え、『アララギ』のアリアズムがこの特質を短歌から切り離したと指摘。〈思想〉については、コミュニストの唯物論的思想を批判し、「美に対する欲望、詩情に対する憧憬をもたなければならぬ」と提言する。本文は『空には本』刊行の前年、『短歌研究』第14巻第3号（昭和32年3月）の「匿名批評」のページに呂賛尊の筆名で掲載された。

## 企画展記念講演会のお知らせ

演題：寺山修司と郷土青森

講師：福島 泰樹（歌人）

日時：令和7年10月11日（土）

会場：弘前プラザホテル（代官町）

・日程等は変更になる場合があります。

・詳細は文学館ホームページ、広報ひろさきなどでお知らせします。

## 「生誕90年 寺山修司—放たれた歌」より資料紹介

### ◆第一章 寺山修司 若き日の歌—『空には本』

『空には本』は、寺山修司が「チエホフ祭」で歌壇デビューして以来、短歌雑誌に発表した歌群の集大成として、昭和33年に刊行した第一歌集。

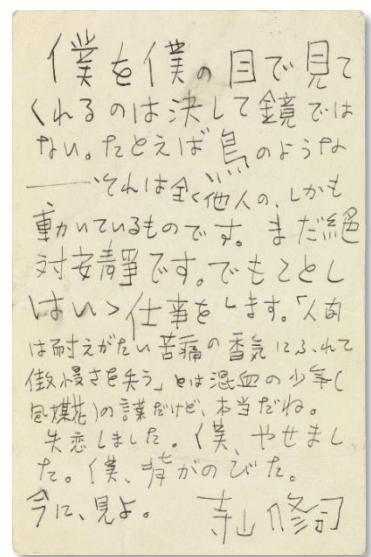
303首（挿画頁の2首を加える）が14章で構成されている。

『空には本』に収められた短歌の大半は、昭和30年から約3年間にわたる闘病生活の中で詠まれた。その間の事情を伝えるのが、寺山が青森県三沢市在住の「恩師」中野トクに宛てた書簡である。書簡は昭和28年（高校2年生）から昭和38年までの10年間で75通に及び、そのうち3分の2が入院生活で書かれたものである。本展では、複製を含めて10点の書簡を展示する。



寺山修司第一歌集『空には本』  
的場書房 昭和33年6月

表紙カバーは、岸田衿子による線描。歌集の始めと終わりの見返しには、短歌をシャンソンにアレンジした楽譜を印刷するなど、短歌という伝統形式に時代の空気を取り入れたモダンな趣向を試みている。



寺山修司書簡・中野トク宛  
昭和31年1月27日消印

『まだ絶対安静です。(中略)「人間は耐えがたい苦痛の香気にふれて傲慢さを失う」とは混血の少年〈風媒花〉の言葉だけど、本当だね。』

〈三沢市寺山修司記念館蔵〉

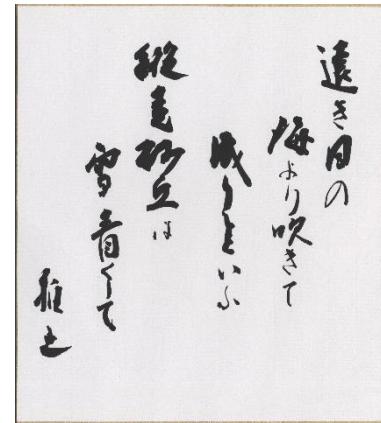
### ◆第二章 角川短歌賞受賞の三歌人

#### 江流馬三郎歌集『縦走砂丘』、色紙

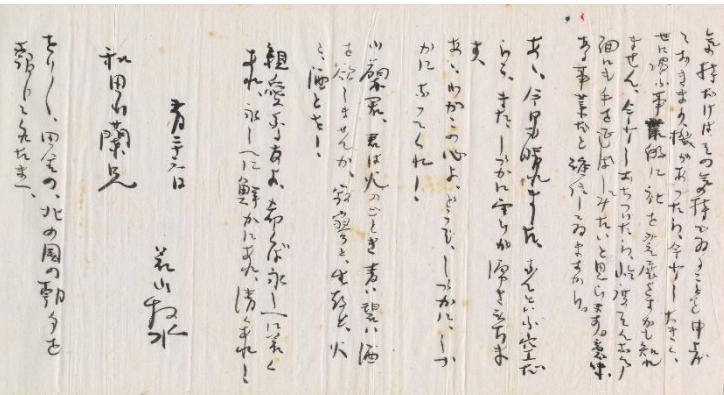
江流馬三郎（中村雅之）は、昭和3年に青森県西津軽郡車力村（現・つがる市）に生まれた。47年「縦走砂丘」（筆名・江流馬三郎）で第18回角川短歌賞を受賞。色紙の歌「遠き日の海より吹きて成りしといふ縦走砂丘は雪青くして」は歌集『縦走砂丘』に収められた一首。〈『縦走砂丘』は個人蔵〉



『縦走砂丘』  
文芸協会出版  
昭和49年10月1日



#### ◆第三章 青森県歌壇、黎明期の息吹



#### 若山牧水書簡・和田山蘭宛 明治45年5月26日消印

明治44年11月、青森県初の活版印刷による短歌雑誌『東北』が加藤東籬、和田山蘭、越前翠村によって発行された。3人はいずれも若山牧水に心酔しており、『東北』は牧水の『創作』の系統誌の感が強いものであった。この書簡は『東北』創刊の翌年に牧水が山蘭宛てた1通である。書中には次のような一節がある。「山蘭君、君は火のごとき青い碧い酒を欲しませんか、寂寥と、生存と、火と、酒とを！ 親愛なる友よ、希くば永しへに若くあれ、永しへに鮮かにあれ、清くあれ！」

〈五所川原市教育委員会蔵〉

## 津軽の文学の祖・建部綾足展

会期：令和6年12月11日～令和7年2月24日

建部綾足（享保4年～安永3年）は、江戸時代中期、山鹿素行の血を引く弘前藩の家老の次男に生まれた。幼少から文武の英才、才氣煥発、また美貌でもあったが、20歳の年、兄嫁と通じて駆け落ちしようと果たせず故郷を出奔。56歳で江戸で没するまで身の置き所も人間関係も変遷しつづけながら、俳人・歌人・読本作者・国学者・画家として、多彩に激しく生きた。また、俳号では、葛鼠、涼岱などを年代によって使い分け、画号では、凌岱、寒葉斎、片歌では綾足と様々である。

本展では、津軽における「文学の祖」（小野正文『続北の文脈 青森県人物文学史』より）といわれる建部綾足にかかる著作を中心に展示し、その魅力を紹介した。

なお、今回の展示は弘前市立博物館と初の連携企画となり、当館では文学者としての綾足を、博物館では画家としての綾足を展示。来館者には「おさかなカード」を配布し、2館のカードを合わせると綾足の作品を採り入れた絵柄が完成するもので、好評を博した。



建部綾足肖像画  
画・北尾重政



建部綾足『本朝水滸伝』  
安永2年  
〈弘前市立弘前図書館蔵〉



おさかなカード

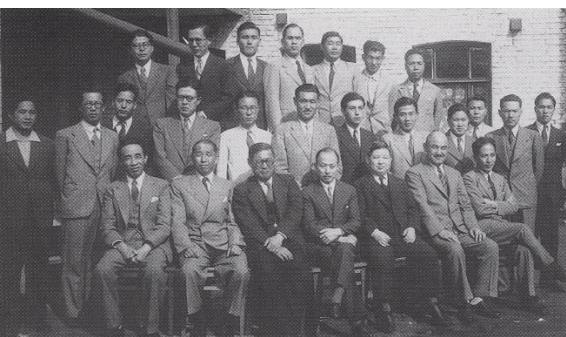


建部綾足（綾足）  
俳画軸「野僧焚火」  
(青森県近代文学館蔵)

## スポット企画展 新収蔵資料展

### 戦後モスクワ一番乗りー国際ジャーナリスト坂田二郎の旧蔵資料

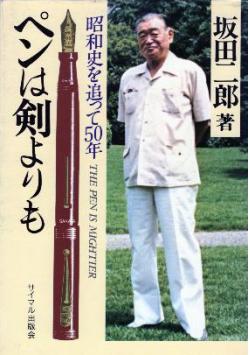
坂田二郎（明治42年～平成3年）はアメリカのサンフランシスコに生まれ、小学校から旧制高校までを母の郷里・弘前で過ごした。東京帝国大学を卒業し、新聞連合社（のちの「同盟」「共同」）に入社。記者として社会・政治・外交の第一線で活躍した。昭和12年に日中戦争が勃発した中国に渡り、17年からはソ連特派員として独ソ戦の死闘と太平洋戦争を観望、対ソ終戦工作に苦悩する佐藤尚武大使と起居をともにした。27年には記者（欧州移動特派員）として戦後モスクワ一番乗りを果たし、スターリン末期のクレムリンを報道した。日本兵捕虜問題、ドイツ、ユーゴスラビアなど、欧州の情勢を報道。その後、NHK解説委員として30年にわたりニュース解説を担当し、国際ジャーナリストとして50年の足跡を残した。本展では、坂田のご遺族から近年寄贈された資料を展示し、国際ジャーナリスト・坂田二郎の活躍を概観した。



在クイブイシェフ大使館にて  
(前列中央・佐藤尚武大使、その後ろ・坂田)  
昭和17年夏(32歳)



坂田愛用の手帖  
歐州移動特派員時代から帰国した後に至るまで、スケジュールや取材内容等が書かれている。  
(1952年～1980年 全21冊)



『ペンは剣よりも』  
サイマル出版会  
昭和58年8月8日

